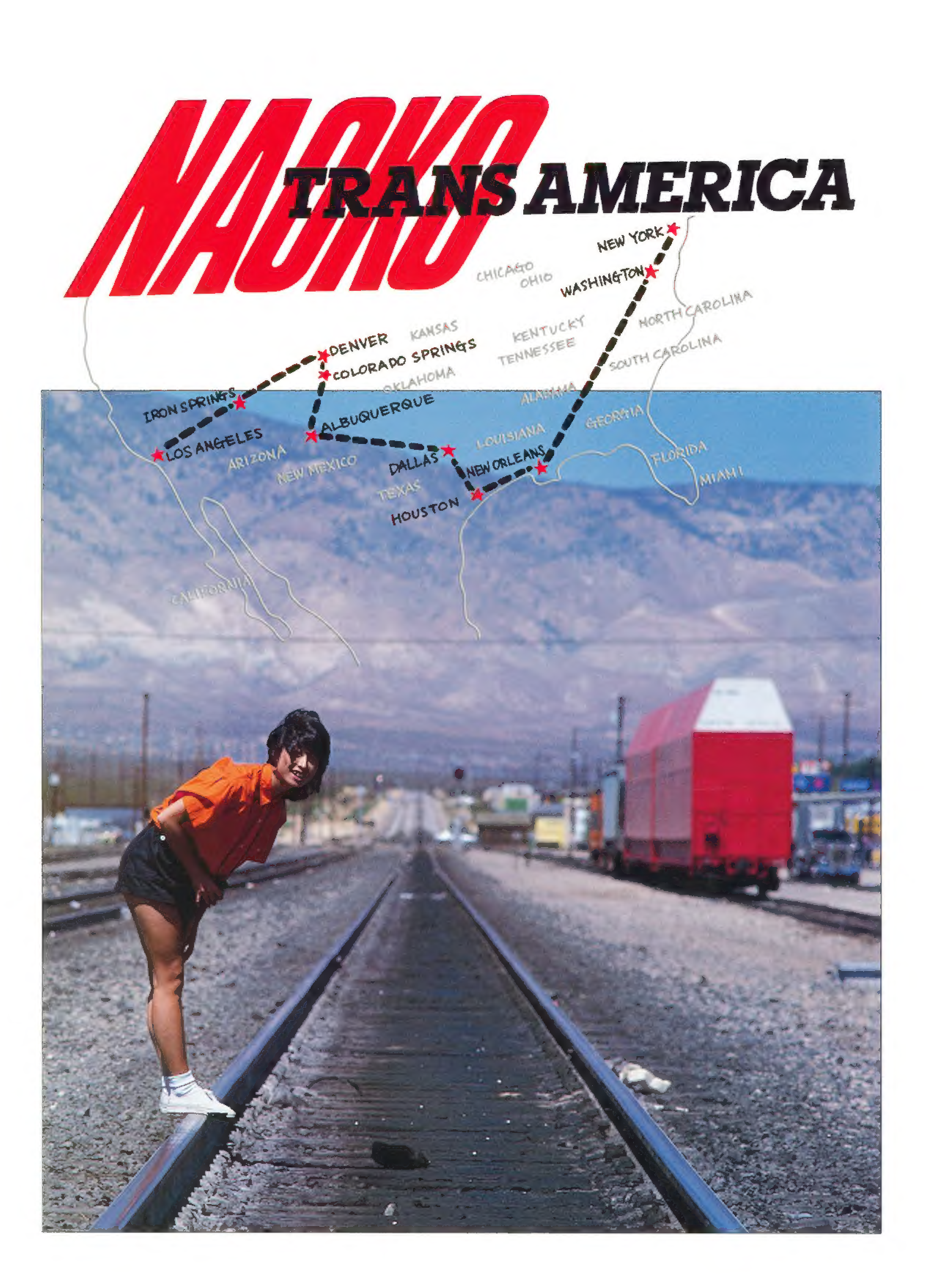

TRANS AMERICA
NAOKO
デラックス近代映画


NAOKO
TRANS AMERICA
NEW YORK
WASHINGTON
CHICAGO
OHIO
NORTH CAROLINA
SOUTH CAROLINA
KENTUCKY
TENNESSEE
KANSAS
DENVER
COLORADO SPRINGS
OKLAHOMA
IRON SPRINGS
ALBUQUERQUE
ALABAMA
GEORGIA
LOS ANGELES
ARIZONA
NEW MEXICO
DALLAS
LOUISIANA
NEW ORLEANS
FLORIDA
MIAMI
TEXAS
HOUSTON
CALIFORNIA



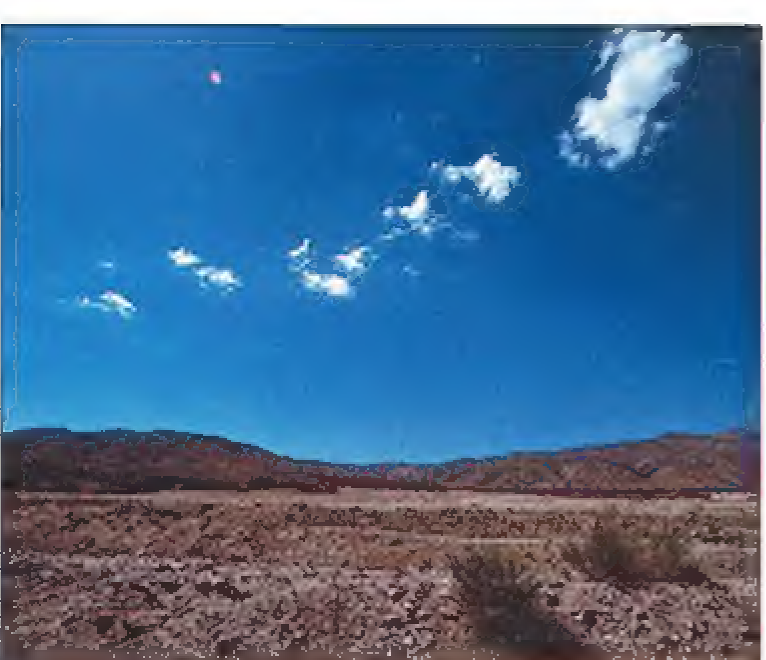





3100





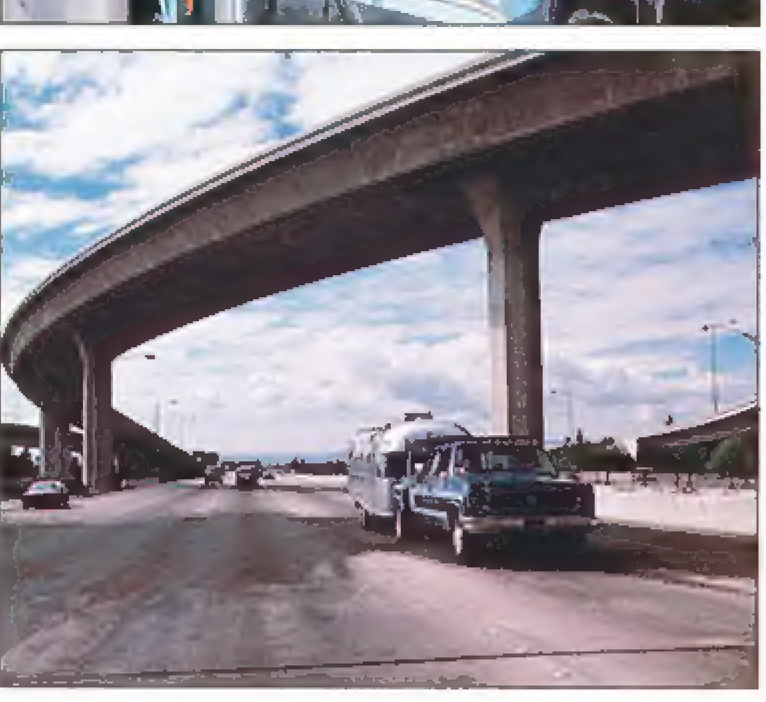












9月7日

いよいよビデオ『9½～Fantastic Journey～』撮影開始だ　奈保子は午前6時に起床　朝食をすませると　マイクロバスに乗り込んでホテルを出発した

ロスからハイウェイに乗り北上する　1時間も走ると人家はなくなり砂漠地帯となる　その砂漠地帯を抜けると　パッと平坦な地がひらけてくる　緑の木に点々と白い花をつけはじめたコットン畑が目にとびこんできた

「えっ!?　あれがわたの木なんですか?　うわッ!!　降りて手でさわってみたいなァ」

ためいきまじりに奈保子がつぶやく

「帰りに時間があったら寄ってみよう」

ディレクターがそう言う　コットン畑を過ぎると次はオレンジ畑　その次がレモン畑　その真中をハイウェイは一直線に果てしなく伸びている　マイクロバスは100キロ以上のスピードで直進する

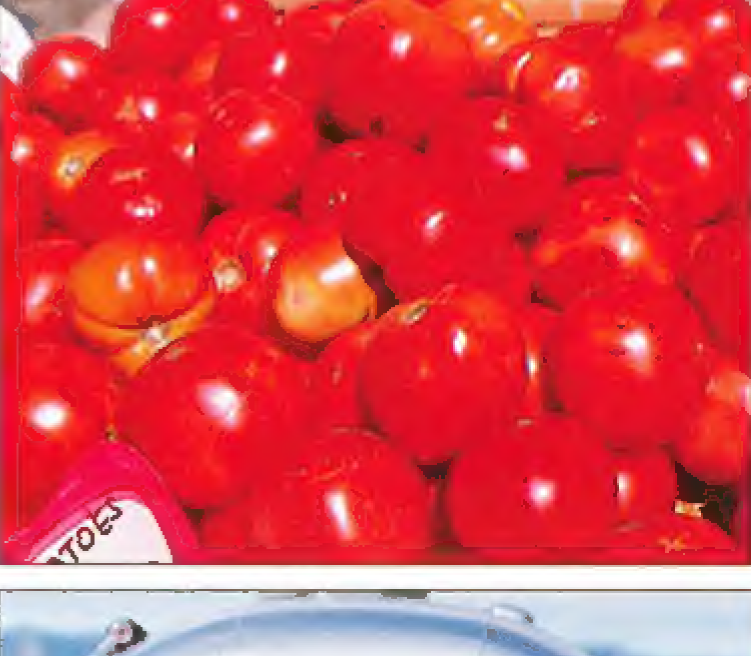
「アメリカってほんとうに広いわね　こうして車で走ってみて初めてわかった」

ホテルを出て約3時間　やっとロスト・ヒルに着く　ここが最初のロケ地だ　油田地帯である　平地に林立するやぐら　その先端から炎があがっている　その光景をバックに撮影

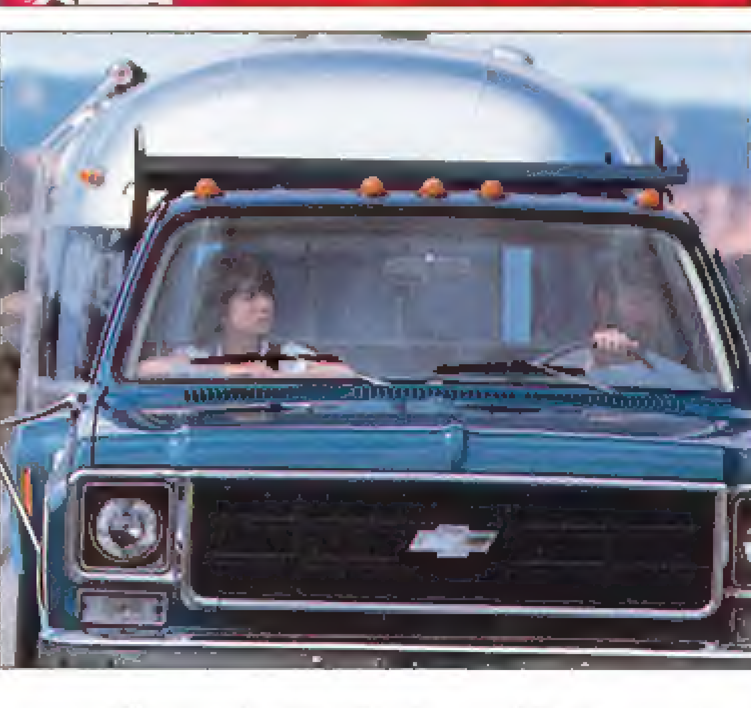


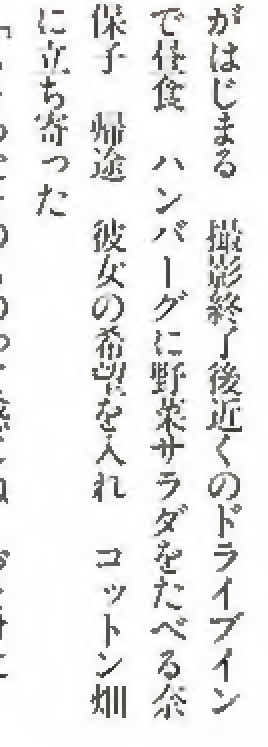












がはじまる　撮影終了後近くのドライブインで昼食　ハンバーグに野菜サラダをたべる奈保子　帰途　彼女の希望を入れ　コットン畑に立ち寄った

「もうわたそのものって感じね　おまけにあったかい！」

ピンポン玉ほどの大きさのわたの花に手をふれた奈保子は大感激！　満開期まで1カ月ほど早いため　まだ1本の木に5～6コしか花は咲いていない　あとはつぼみだ

「これがぜんぶ咲いたらキレイでしょうね」

地平線に沈む大きな太陽を背にホテルに戻る

「油田を見たのも生まれてはじめてだったしわたの花にもさわれたし　もう　サイコーの1日だったなあ」

9月8日

キャンピングカーでハイウェイを走りながら撮影する　ロスから車で2時間ほどのディス・バレー付近がロケ地だ

キャンピングカーで奈保子がアメリカ大陸を横断する……というのが　今回のビデオの設定だ　途中　ガソリンスタンドで給油したりまた　エンジン・トラブルで車がストップそのため奈保子は車を降り　とぼとぼ砂漠の道を歩く　といったシーンを撮影



LOST HILL

































9月9日

今日は朝から　ロス近郊のマリナ・デル・レイのヨットハーバーでロケをする予定だったが　奈保子がかぜ気味のため中止となる

「大丈夫です　やりましょうよ」

がんばり屋の奈保子がいったが　スタッフになだめられ　大事をとって午後3時まで　ホテルのベッドで横になっていた

夕方　すっかり元気を取り戻した奈保子を乗せたキャンピングカーは　バスク・ロックに向う　砂漠の山の中といった感じの土地で　あちこちにサボテンがニョキニョキとつっ立っている　近くで牧場を経営しているというアメリカ人が　サボテンの実を採ってきてくれた　テニスボールほどの大きさで緑色をし



た実だ　その実にもトゲがある　ナイフで実を割ると中は赤い

「ちょっとヌルヌルした感じがして　少し気持ち悪かったけれど　思ったより甘いの　水分もあってなかなかおいしかった」

ちょっとビクビク気味に実を食べた奈保子

陽が落ちて撮影開始　砂漠のど真中で野営するシーン　焚火に西部劇に出てきそうなアンティックなコーヒーポットを乗せる

昼間は30度近い暑さなのに　陽が暮れるとぐんぐん気温が下る　奈保子は洋服の下にビニールを巻き　毛布を体に巻きつける

「まわりは真暗だから　すごい星がキレイなのね　寒かったけれど夜空に吸い込まれそうでロマンチックだったなぁ」



MONUMENT VALLEY

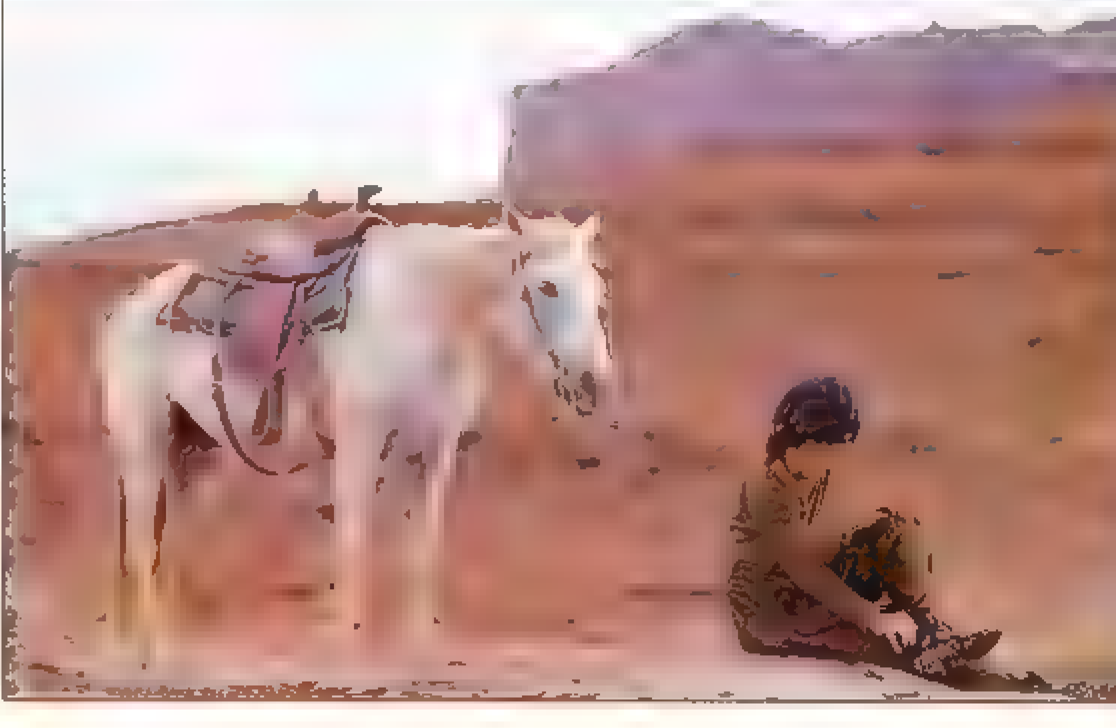












9月10日

朝5時にホテルを出発し　ロスのグラックス空港に向う　この空港で19人乗りのセスナ機に乗り込む

「天井がとっても低くって　かがんで乗らないと頭をぶっつけてしまうの」

という双発のプロペラ機をチャーター　このセスナ機で　ユタ州とアリゾナ州の間にあるページという小さなインディアンの町に着陸する　ロスからページまでセスナ機で約2時間かかった

この町のホリデー・インというホテルに大きな荷物をあずけ　車でモニュメント・バレーに向う　砂漠の中の一直線の道路を時速150キロという猛スピードでぶっ飛ばす　約2時間ちょっとすると　突然　前方に太陽に赤く輝く巨大な岩山が姿を現わす

「うわ　すごい!!　あれッ!?　あの岩山の景色　映画で見た気がするなァ」

奈保子が歓声をあげる　それもそのはずで



このモニュメント・バレーは　駅馬車　だとか　未知との遭遇　など数多くの映画に登場したことのある場所なのだ　スタッフが白い馬を引いていた14～15歳のインディアンの少年に話をつけ　その馬を借りることにした　白く美しい馬に奈保子がまたがった

「最初のうちはインディアンの男の子に引っぱってもらっていたんだけれど　少し慣れてからひとりで乗って馬を歩かせたの　とってもおとなしい馬で〝あそこまで歩いて〟っていうとちゃんと歩いてくれるのね」

赤色の岩山をバックに白い馬に乗った奈保子は砂漠の中でひときわ光る

「太陽が雲に隠れると　岩山が紫色やブルーに変り　再び太陽が顔を出すと淡いピンクや金色になるの　うっとり眺めちゃった」

ロケは午後2時過ぎまで続いた　ページのホリデー・イン・ホテルに戻ったのは夕方　美しい夕やけが印象的だった




PAGE





9月11日

砂漠地帯には珍しく朝から雨が降っている

「砂漠にも雨が降るのね」

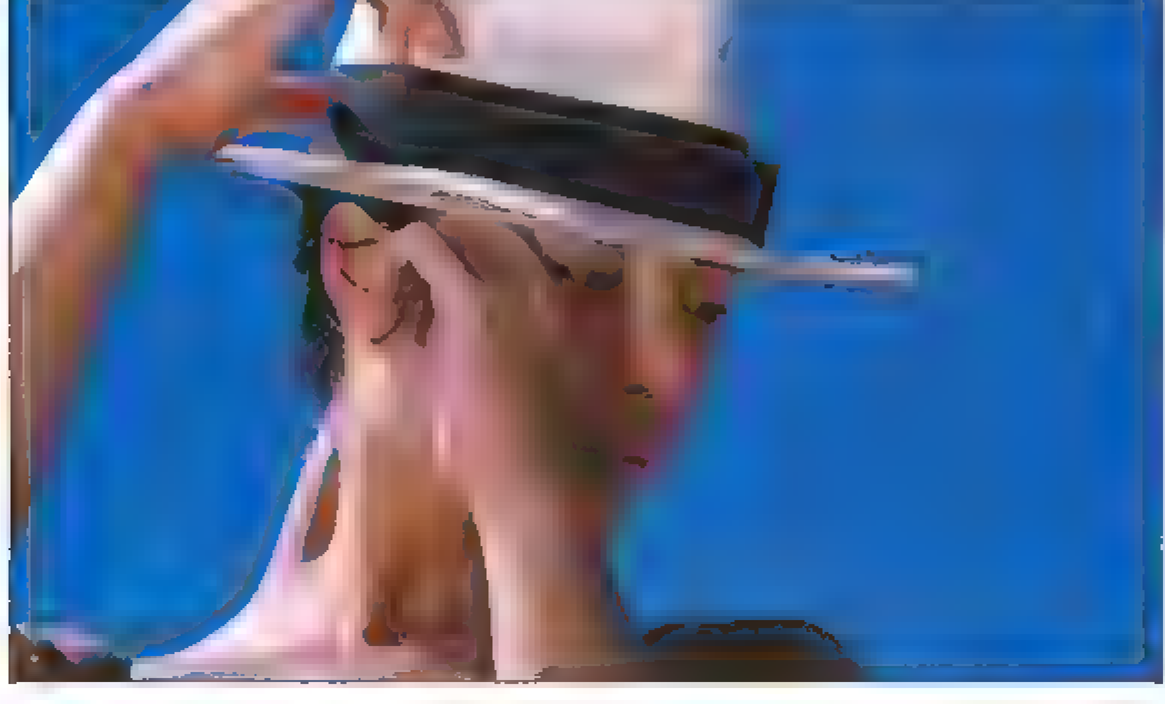
ホテルの窓から空を見あげる奈保子　黒い雨雲が矢のように流れてゆく　ロケは中止だ　まだかぜが完全に治りきってない奈保子はホテルの中で静かに休養する

お昼　急に雲が切れはじめ日が射しはじめたのでロケを再開する　ホテルから車で1時間ほどのレイク・パウエルまで出かける　湖畔のサボテンの間を歩く奈保子の姿をビデオに収めた

夕方の6時54分　例のチャーターした19人乗りのセスナ機に乗り込む　デンバー近くのコロラド・スプリングスに移動だ　離陸の時は雲が切れうす日が射していたのに　たちまち濃い霧と黒い雲に囲まれ視界はゼロ　おまけに気流が不安定なためか　小さなセスナ機は大ゆれにゆれる

「いままで飛行機には何回も乗ったけれど





こんなの初めて！ まるでクルーザーに乗ってるみたい スーッと下がったり上ったりで水平に飛ばないのよね〝なんで こんな飛行機に乗っちゃったんだろう〟と考えたら 急に悲しくなって涙が出ちゃった 背中をまるめて カセット・テープかかえていたの ふと私の前のカーテン越しに操縦席を見たら操縦士さんがパンを噛って ジュースを飲みながらのんびり操縦してるンですよ～ その落ち着いた姿を見たら少し安心したんです」

悪天候のため 1時間ちょっとの予定が2時間以上かかってコロラド州のコロラド・スプリングスに着陸した そこから車で 標高3000メートルのクリップル・クリークに向う 山道を登るにつれ 雨雲は足の下になり満天の星空がひろがりはじめる

途中のドライブインで夕食 部屋にはあかあかとストーブが燃えている 夜になると ぐっと冷え込むのだ 夜の12時にやっと今夜泊るインペリアル・ホテルに着いた







CRIPPLE CREEK







CRIPPLE CREEK



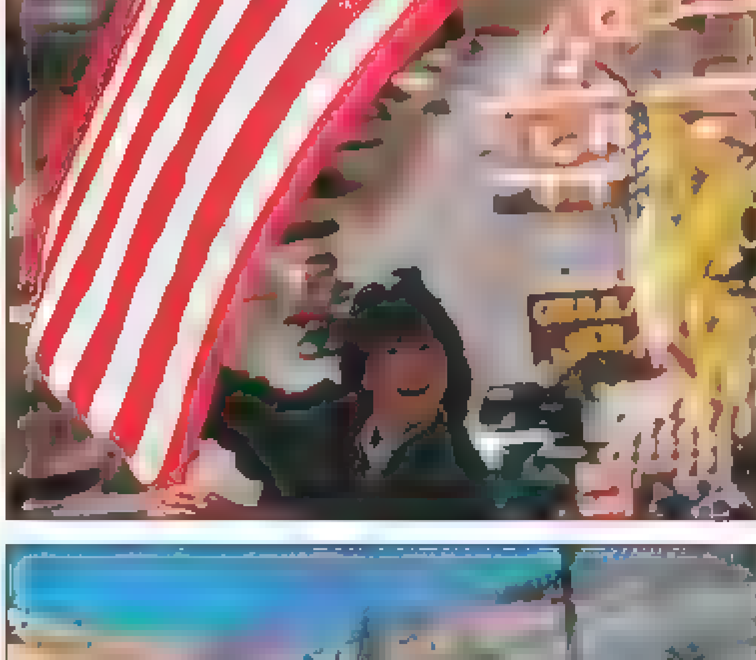



COTTAGE INN
CAFE
ICE CREA
GIFTS


CAFE



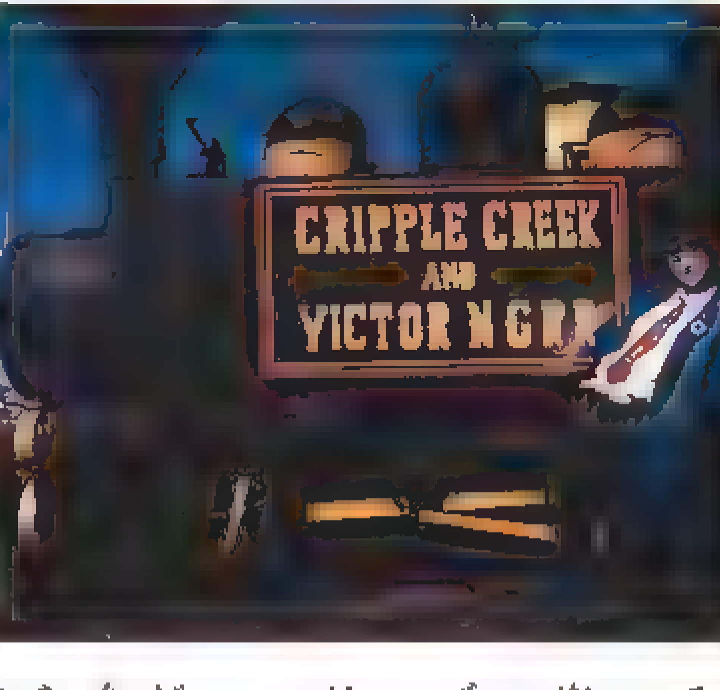
















9月12日

「お早うございます」
午前6時　奈保子は元気に食堂に姿を見せる
「あれ　早いね」
「窓から冷たいスキ間風が入ってきて　それで目が覚めちゃったの　寒いわね」
このインペリアル・ホテルは　いまから100年ほど昔に建てられたという古いホテルなのだ　そのため　どうしてもスキ間風などが部屋に入ってくる　シャワー室もあったが　水道管が凍ったか壊れたかしてお湯が出ないため　昨夜はシャワーも浴びれなかった奈保子
「氷が張ってたよ」
スタッフが　ホテルの中庭に張った氷を持って食堂に入ってきた
「今日なに着たらいい？　Tシャツだけじゃ寒そうだわね」
「そうね　昼間は暑くなるっていうけどブルゾンでも持っていく方がいいね」
「きのうまでは暑い暑いといってたのに　今日は寒さでふるえてるんだもんね　アメリカって広いのね」
「特別よ　ここは3000メートルの山の上だから冷えるのよ」
奈保子はヘア・メイクさんといろいろ話をしながら朝食をすませる
午前8時からクリップル・クリークでのロケがスタート　この町も　その昔ゴールド・ラッシュで生まれた町だ　近くの金山から掘った金鉱を運ぶために小さな鉄道が敷かれたのだ
いま　その鉄道は観光用に走っている　オモチャのように小さく古い蒸気機関車に奈保子が乗り込む　ハンドルを握って運転したり　汽笛をおもしろ半分にピッ　ピッ　ピーポーと鳴らしたりする　そんな姿をビデオ・カメラが追い続ける
1時間半ほどで蒸気機関車のシーンを撮り終え　クリップル・クリークの町中に移動
「坂の多い町で　山や町の感じがなんとなく



スイスに似てるンですよネ　でも　カウボーイが出てきそうな感じの家があったり　町の中をロバの親子がのんびり歩いてたりしてるところは　やっぱりアメリカっぽいかな　ほとんど若い人の姿は見かけなかったの　お年寄りの夫婦が手をつないでゆっくりした足どりで坂を登ってくるンですよ　そういう姿がぴったりの町なのね」

日当りのいい場所ではTシャツでも暑いぐらいだが　日陰に入ると汗がスーッと消えていき　風が冷たい　奈保子はブルゾンを着たり脱いだりしながらビデオ・カメラの前に立っていた

午前中に　この町での撮影はすべて終了　ホテルに戻ってバイキング・スタイルの昼食

午後　奈保子は1時間ほど町をぶらつく

「アンティックなお店が多いわね　4弦ギターなんかもあるしね　あと　インディアンの人が作った民芸品などのお店とかを見てまわったけれど　特にほしいものは見つからなかったから何も買わなかった」

町を歩いていて奈保子がびっくりしたのは　あの蒸気機関車の汽笛の音だ

「町全体が静かなこともあって　すごくひびくのね　そうとは知らずおもしろ半分に鳴らしたでしょう　町の人に迷惑なことしちゃったなあァ〜」

ホテルに戻ると車でデンバー空港に向う　デンバーまで約3時間　午後6時54分デンバー発のジェット機でニューメキシコ州のアルブカーキまで飛んだ

空港からホテルに行く途中　〝ジャパニーズ・キッチン〟の看板を見つけ飛び込む

「ロスを出てから4日間　ぜんぜん日本食をたべてないんだもん！　私　ロスのスーパーでノリとかカップ・ヌードル買ったのに荷物になるから置いてきて後悔してたんです　おみそ汁とご飯にありついてうれしかったな　私やっぱり日本人なんですね」

夜11時　ホテルに着いた






LT


ALBUQUERQUE
Open at Noon
HOURS
LUNCH 12:00-4:00
DINNER 5:00-10:00
SALOON
LAMY





BAGGAGE ROOM









9月13日

朝8時　アルブカーキのホテルを車で出発する　1時間半ほど走ると　砂漠の中にぽつんと鉄道の駅が見えてくる　レミー・ステーションだ　その駅と　駅前に1軒のレストランがあるだけで　あとは何もない

「駅長さんも実にのんびりした人で　とってもやさしい人なの　駅の周辺には家も畑もなくてバッタがいっぱいいたなァ」

列車が来るまでの時間を利用して　駅の中や駅前のレストランなどで撮影する

「駅の真向いにあるレストランというのが砂漠のまっただ中に置いておくにはもったいないほどシャレたお店　それに　そのお店のハンバーガーのおいしいこと！　アメリカに来て食べたハンバーガーで最高！」

このレストランで奈保子は　かわいい赤ちゃんとすっかり仲よしになった

やがて列車の到着時刻が近づいたので駅に出かける　待合室には　いつの間に来たのか7～8組の乗客が集まっていた

だが到着時刻になっても　いっこうに列車は姿を現わさない

「駅長さんの話によると　30分から40分おくれるのは当り前なんだそうなのね　駅長さんもお客さんも　列車がおくれることなんか全く気にかけてないの　ほんとにのんびりしたものですよ　私もついのんびりムードになっちゃった」

やっと列車が入ってきた　奈保子とスタッフが乗り込み車内で撮影をはじめる　シカゴからロスまで4日をかけて列車の旅を楽しむという乗客のために　車内には豪華な食堂車やビンゴをするゲーム室などが整っている

「2階建てで　2階は全部ガラス張りになってるのね　おまけに個室にはチェスが出来るようになっていてすごいの」

1時間半ほどでアルブカーキに着く　荷物を持って空港に駆けつけ　ダラス経由でヒューストンまで飛んだ

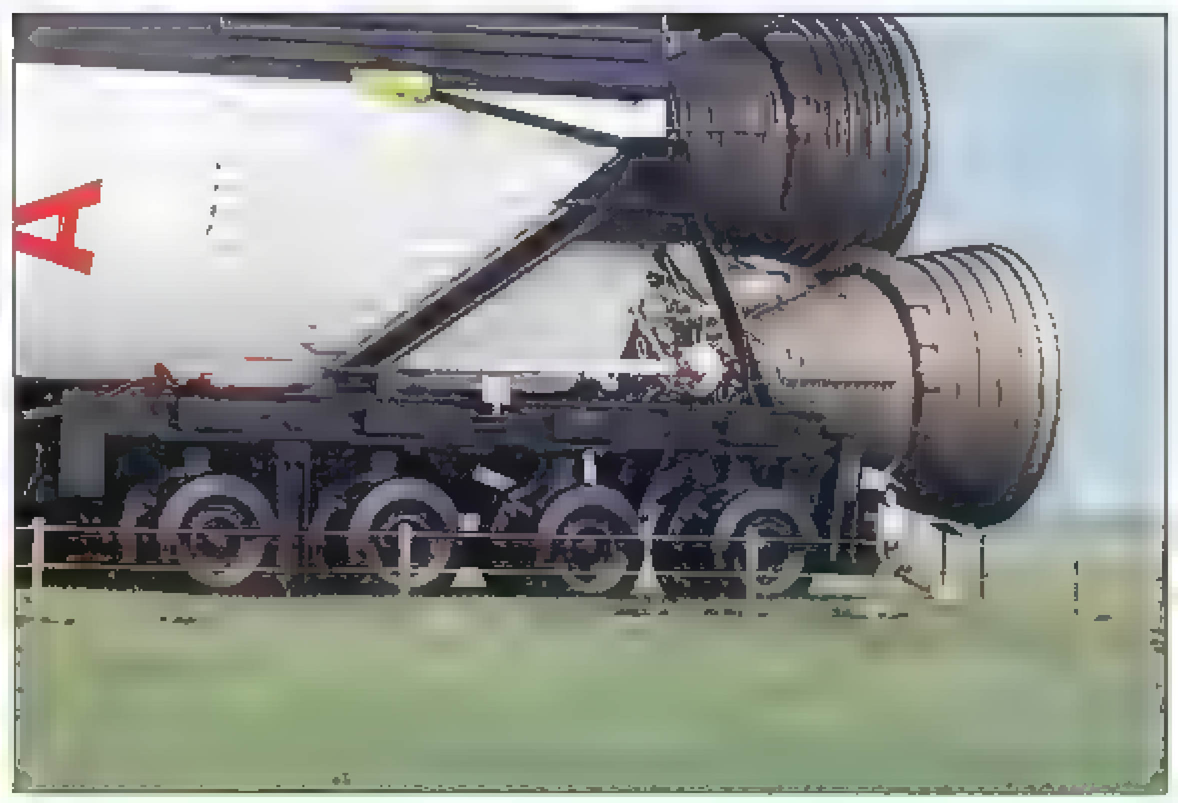


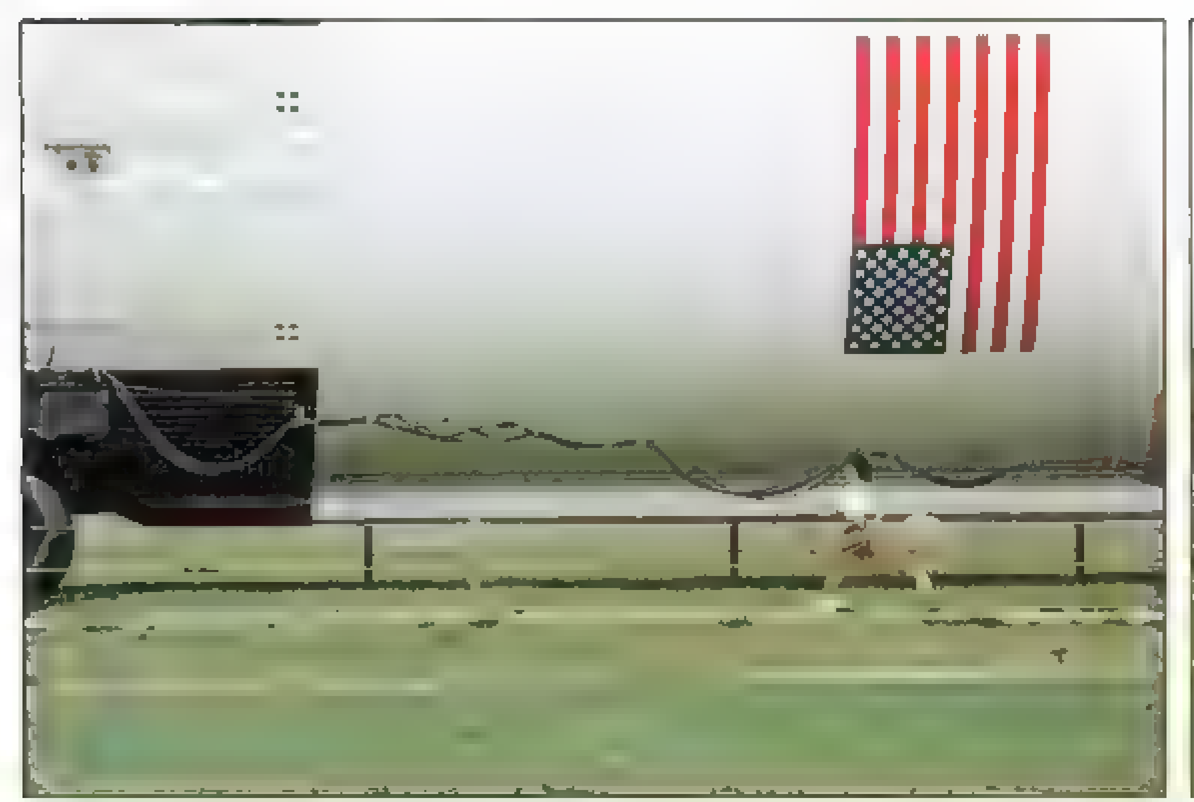
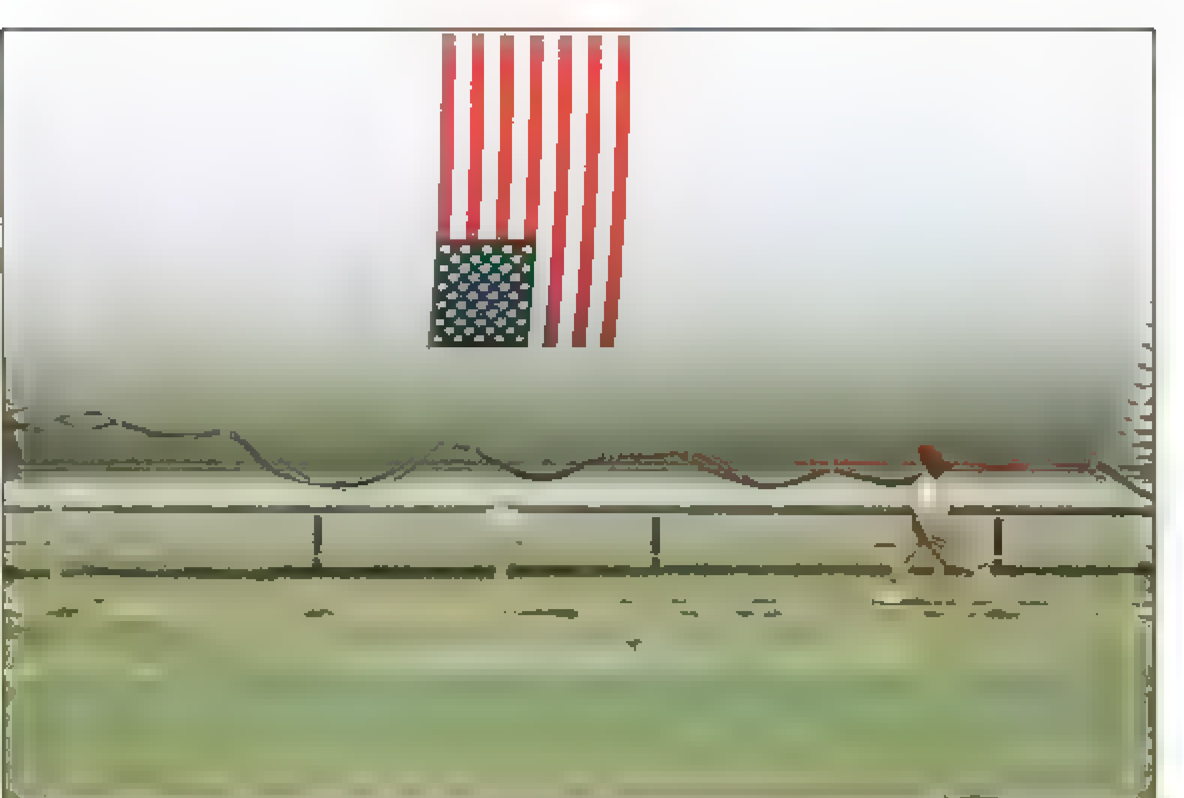
HOUSTON






USA



9月14日

「このヒューストンってね　ついこないだまではなんにもない湿地帯で　ワニが棲んでるだけの土地だったんですって」

アポロ月面探査計画のために誕生した町がヒューストンなのだ

いま　ここでは宇宙ロケットの打ち上げは行われていない　通信基地になっているのだ

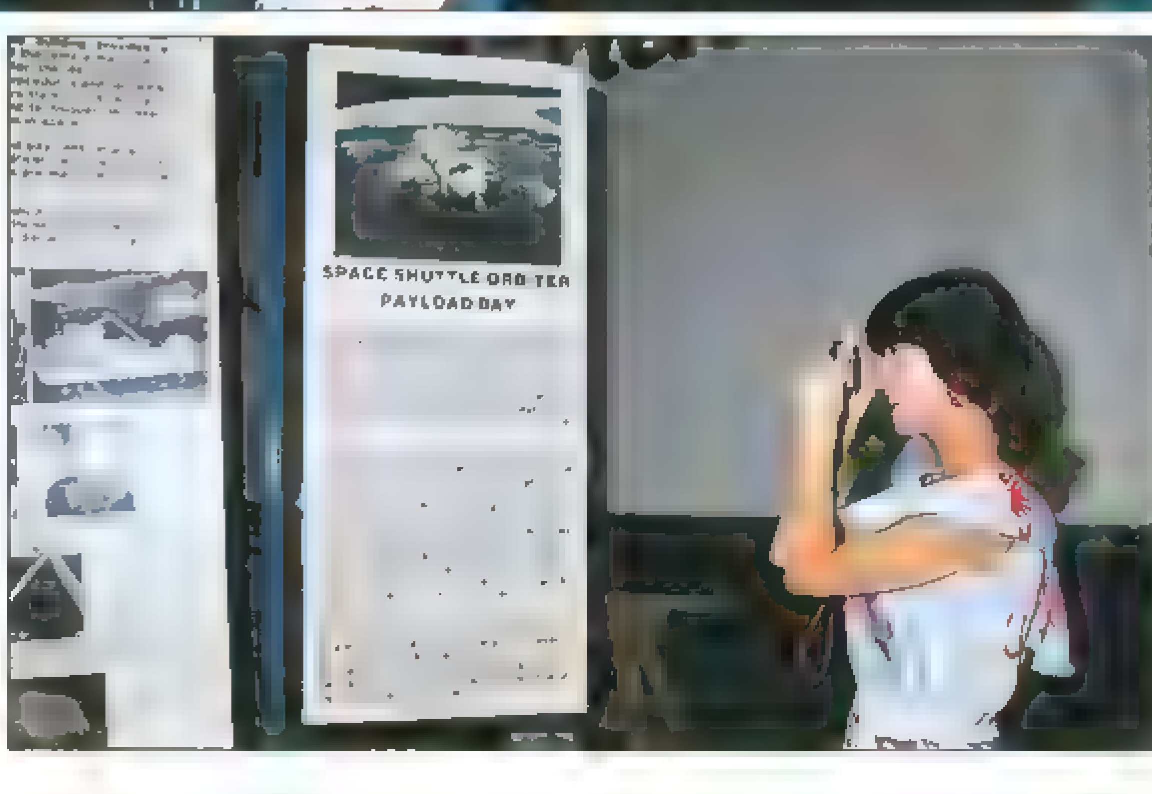
それでも基地内出入りは厳重で　カードを入れ自分の暗証番号のボタンを押さなければ各部屋の扉は開かない

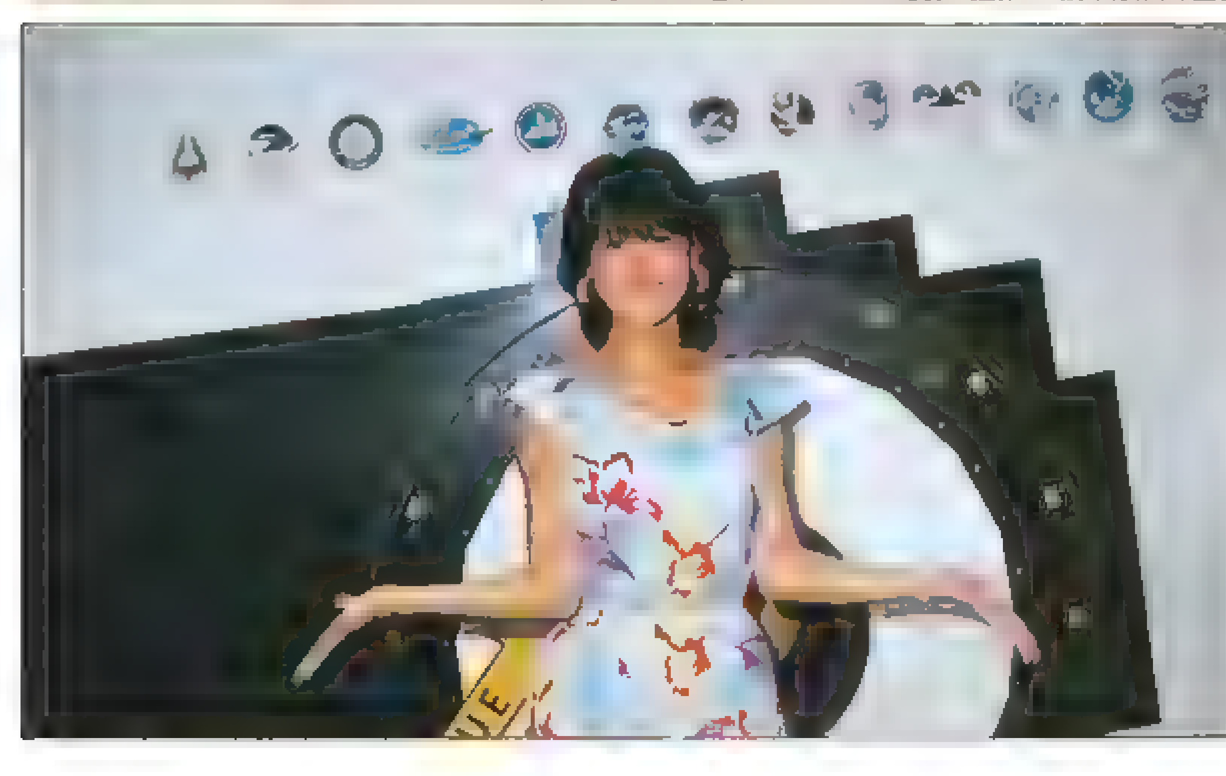
「基地に入ると　本物の宇宙ロケットが置いてあって　びっくりするぐらい大きいの　こんな大きな鉄のかたまりが　遥か宇宙の彼方までよく飛んでいけるもんねエ～」

その巨大なロケットの前で撮影をする　ロケットの端から端まで疾走する奈保子

「20秒近くかかったから　ロケットって100メートル以上の長さがあるんじゃないかな」

土曜日のせいか　基地内にはあまり人影がみ





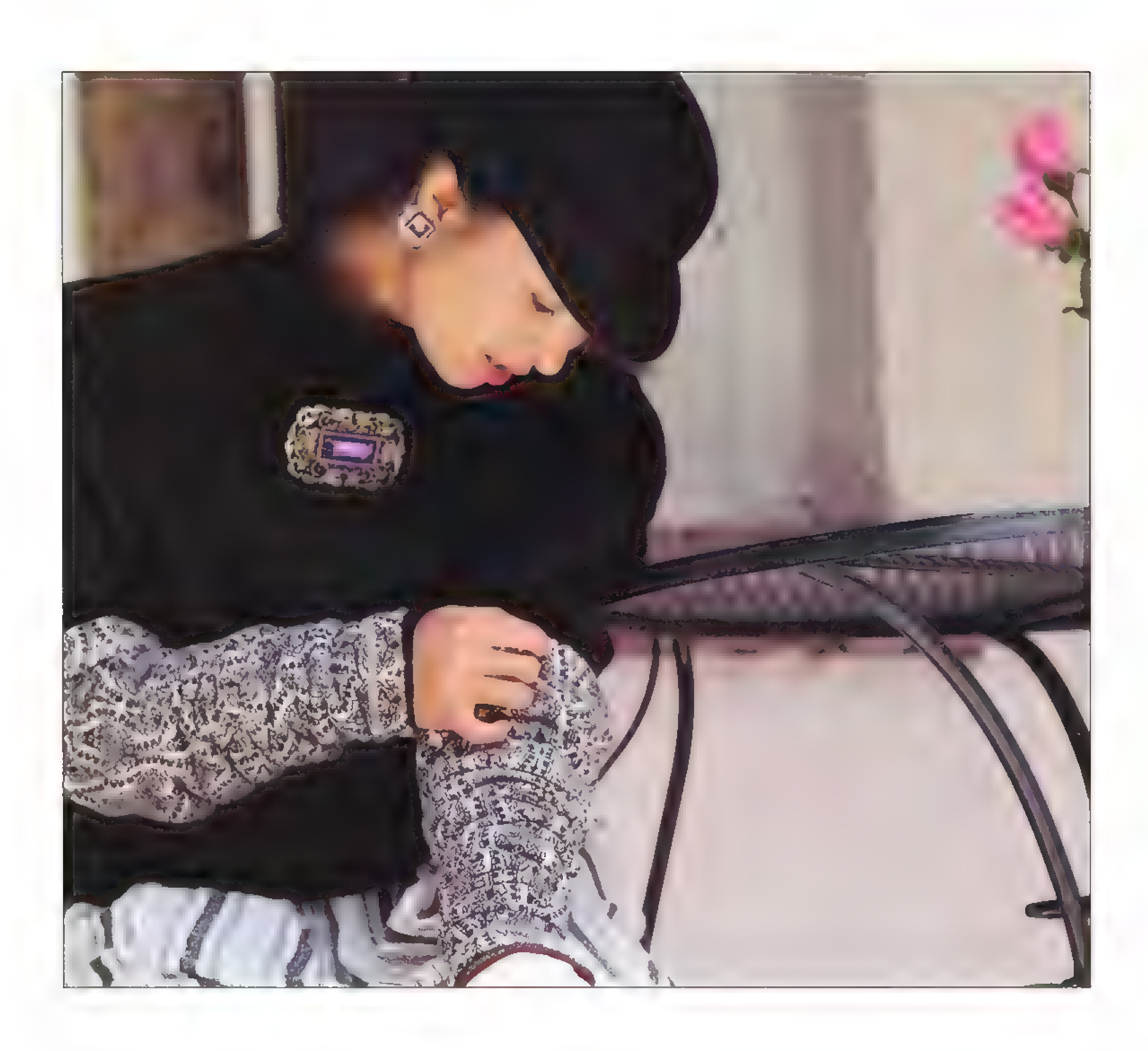
られない
部屋の中には5人までしか入れないため カメラマン 照明などこのプロモート・ビデオの構成を担当しているスタッフ4人と奈保子だけが シュミレーションルーム スペースシャトルの訓練室 コンピュータールーム 記者会見室などを見学
「通信室では いま飛んでる衛星を追跡しているんですって いろんな機械が並んでいたから さわらないようにとそれだけ気をつけていたの なんだか映画 ウォーゲーム のコンピューター室みたいな気がしちゃった」
NASAの食堂で奈保子はパンとサラダ コーヒーなどの軽食をとる
「とにかく見るもの全部に驚いちゃう」
ヒューストン宇宙基地は現代科学の最先端を行く巨大な生き物なのだ
午後5時45分ヒューストン発のジェット機で一行はニューオーリンズに向け飛び立つ


READINGS
PALMS


NEW ORLEANS




6.
3











9月14日（パートII）

定刻どおり　午後6時45分にニューオーリンズ空港に到着　ヒューストンからジェット機でちょうど1時間

ホテルに荷物を置くと　ただちにジャズの本場といわれている街に出かける　土曜日の夜とあって　どこもかしこも人　人　人であふれかえっている

「ガス燈みたいなグリーンがかった外燈が道沿いに並んでいるの　町全体がしっとりした感じ　すごく雰囲気のある町　人がいっぱいいるけど　東京みたいな圧迫感は受けないですね　きっとセカセカしてないでのんびりしてるからだと思うけど」

というのがニューオーリンズの第一印象　まず　フランス料理店に入って夕食

「とってもおいしい！　パリにいるみたい」

そういえば　町全体がどことなくヨーロッパ的な感じがする　それもそのはずで　ニューオーリンズはフランス人が開いた町なのだ

食後　本場のジャズを聴きに行く　どこの店も超満員で店の前には席のあくのを待つ人の列が出来ている　やっとのことで1軒の店に入る　かなり年輩の黒人女性が賛美歌のような歌をうたっていた　お客もほとんどが年輩の黒人ばかり

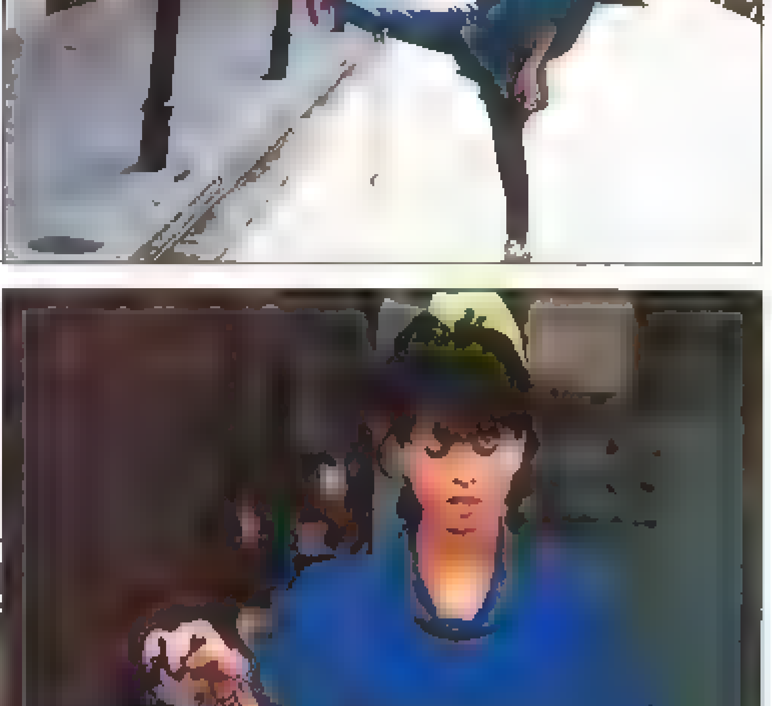
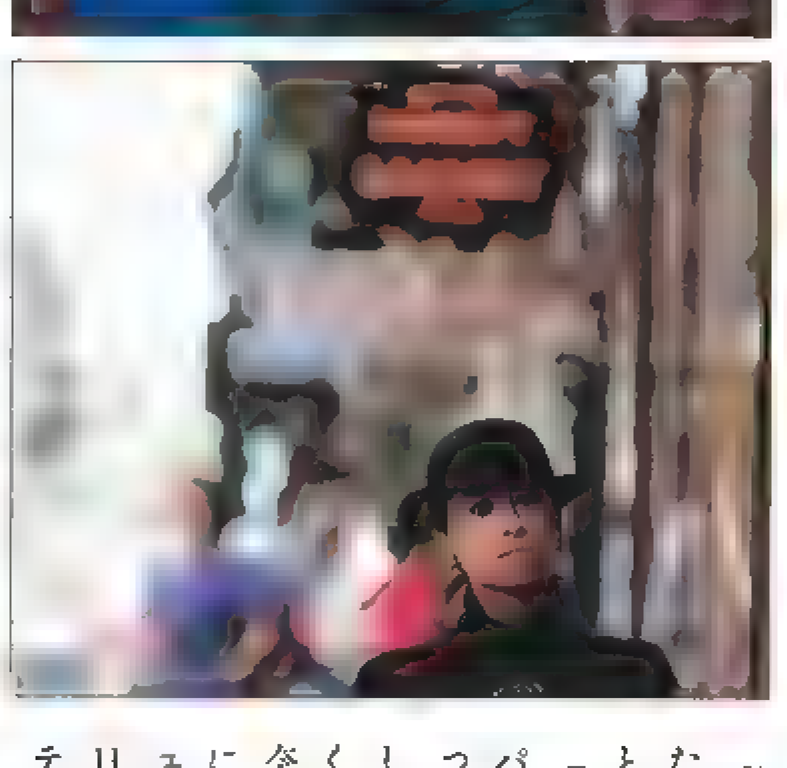
「いままで一度も聴いたことのない歌だけど　胸にジーンときました」

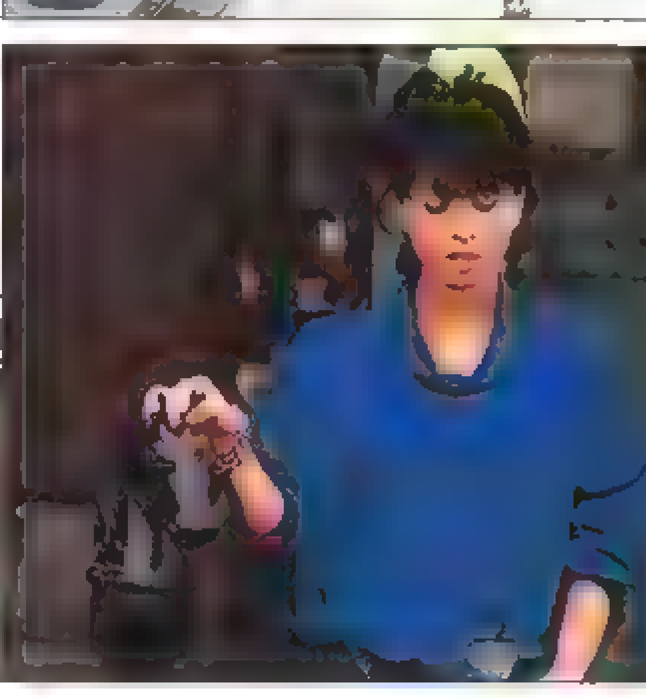
次にブルースを演奏している店に入る　60～70歳ぐらいの目の不自由な黒人男性が　シルクハットにサングラスをかけ　ギターを弾きながらアドリブで歌っている

「何いってるのかわからなかったけど　見ているお客さんが大笑いしたり拍手していてお客さんを本当に楽しませてるって感じがしました　お店を出てびっくりしたのは　お店に入れないお客さんが　中の音楽に合わせて踊ったりしているの　お客さんの方も全身で音楽を楽しんでるって感じがするんです」

さすが　ジャズの本場だけに　お年寄りから



ヨチヨチ歩きの子どもまで　みんな音楽をエンジョイしているのだ

とにかく　街中どこに行ってもナマの音楽が聞こえてくる　街角には必ずといっていいくらい　サックスを吹いていたり　ギターを弾きながら歌ったりしている人がいるのだ

「足もとの開いた楽器のケースにお金を投げ入れると　大張り切りで歌ったり演奏したりしてくれるのよね　感謝の気持ちを音楽であらわしてるみたい」

9月15日

「久しぶりに　ちゃんとしたホテルに泊ってよく眠れました！」

朝　奈保子は元気いっぱいといった顔で現われる　10日以来　すき間風が入るような田舎の古いホテルばかりでまともなホテルに泊まってなかったのだ

午前中　バーボンストリートで撮影　この日も　あちこちからナマ演奏が流れてくる　ホテルのロビーでも　トランペット奏者が演奏していた

「いままで　私が歌ったり聴いたりしてきたのは　ほとんどエイトビートの曲ばかりだったでしょう　ニューオーリンズで耳にする音楽はフォービートばっかりね」

撮影は午前中で終る　夕方近くまでオフとなった奈保子は　買物に出かける

「親指ほどの可愛い小さなお人形さんがあったので　おみやげに10コほど買ったの」

と小さな袋をかかげる

「ニューオーリンズってすてきな町だわ　アパートの窓という窓には観葉植物やお花が出してあるし　大道に絵を並べて売っていたりしていてね　機会があったらもう一度　ゆっくり来たい町ですねっ」

奈保子は　この雰囲気のある町がすっかり気に入った様子　午後5時45分発の飛行機でニューヨークに出発　午後8時ニューヨーク着　日本料理店ですき焼きの夕食をとってからホテルに入った



HOLIDAY IN L.A













奈保子は　ロサンゼルス市郊外にあるピアという町のシースプライトというモーテル風のホテルに泊った

「去年のレコーディングの時　ここに泊ってすっかり気に入ったので　今回もお願いしてここにしたんです　レコーディング・スタジオまで通うには　車でハイウェイを走って30〜40分とちょっと不便なんですけど　ロスの中心街から離れていて静かでしょう　それに目の前が海岸で　すごく落ち着けてのんびり出来るんですよ」

レストランがないかわりに　各部屋には台所が完備していて　自炊が出来るようになっているのだ

「自炊をしてもよかったんだけど　材料を買い出しに行ったりと　いろいろ面倒ですからねエ〜　なにしろ全員で16人という大世帯ですから　それで　ほとんど外食ですませちゃったんです」

外食といっても　近くにはきちんとしたレストランはない　あるのはファースト・フード風の店が海岸通りに並んでいるだけだ

「朝の6時ごろからお店は開いているんですね　シーズン・オフでウィーク・デイなんかサーフィンをやりに来る人がいるぐらいであんまり人通りもないのに……　オムレツのお店がわりと多いんです　最初に入ったお店のオムレツは　とってもおいしかったんだけど種類が少ないのね　それで　次の日からはホテルからちょっと遠いけど　品数の多いオムレツ屋さんで朝食をすることにしたんですそこのお店のシーフードのオムレツがとてもおいしかったですねっ」

ただどこもオムレツとかスクランブル・エッグなどの玉子料理しかやってない

「どのお店のオムレツも　すごいボリュームなんです　朝食べると　もう夕方までおなかがすかないのね　だから　スタッフの人たちも私も　ほとんどお昼は抜きでした」

ありとあらゆるオムレツを食べたのだ

8月30日から9月4日までの6日間は　午後1時からレコーディングが始まった

「朝食がすむと　海岸に出かけて日なたぼっこしながらカセットを聴いたり　その日やるレコーディングの勉強したりして過ごしていたんですよ」

ホテルから砂浜までは歩いて30秒!!　ロスには珍しくお天気がよかったのは　着いた日から3日間ぐらいで　あとは雨が降ったり曇ったりの寒い日が続いた

「だから水着も持ってきたんだけど　泳ぐ気にはなれなかったなあ　レコーディングの後ビデオの撮影があるから　日灼けして皮がむけたりしたら困るし　それに波が高くてこわいんです　せいぜい波打ちぎわで波とたわむれるぐらい」

ホテル暮しをはじめて　2日目か3日目に年に1〜2回しか開かれないという市が海岸通りで開かれた

「朝からにぎわっているから　なんだろうと思って行ったら　海岸通りから車をしめ出して　道の両側にずらっとお店が出てるんです民芸品とか絵とか人形　Tシャツ　皮細工など手づくりのものなんかもいっぱい並べて売っているんですよ　小さなお人形とかブローチ　キーホルダーなど　荷物にならないものなんかを買いました」

また　ある日には車で5分ほどのショッピングセンターまで　気晴らしと運動のために歩いて出かけたこともあった

「ロケ中に食べようと　カップヌードルなんか買ったけど　バッグに入り切らないため持って行かなかったの」

それまで午後1時から6時までのレコーディングが　スタジオの関係から9月5日からは夕方の6時スタートと変わった　夕食はスタジオでハンバーグ

「ロスの10日間　日本食を食べたのは着いた日と　もう1回吉野屋の牛丼を食べたのと2回きりでした」



8月29日の夜　奈保子はロサンゼルスに向け成田空港を出発した　今回のアメリカ行きはロスのスタジオで　12月12日に発売するニューアルバム『9½・NINE HALF』のレコーディングと　このアルバムと同時発売のビデオの撮影のためだった

現地時間の29日正午にロスに到着した奈保子は　ホテルに荷物を置くとただちに　ハリウッドの近くにあるライオンズ・シェア・レコーディング・スタジオに　今度のLPのプロデュースをしてくれたウンベルト・ガティーカ氏を訪ねた

「去年　ロスで初めてレコーディングをしたんだけど　その時もウンベルトさんにはいろいろお世話になったんです　それで挨拶をかねて　ロスに着くとすぐお訪ねしたの」

ガティーカ氏は　プロデューサーであると同時にミキサーとしても有名で　ライオネル・リッチー　フリオ・イグレシアス　オリビア・ニュートン・ジョン　スティービー・ワンダーなど　アメリカのトップ・アーティストのレコード・ミキシングをしている

「ウンベルトさんは　私のことよく覚えてドさってて　顔を見るなり〝今回はあなたにとってつらいレコーディングになるかもしれないけど　がんばって乗り切れば　きっといいアルバムが出来るからね〟と励ましてくれたんです」

もちろん　奈保子もそのことは十分覚悟の上だった

「ウンベルトさんは　今度のアルバム用にと30曲近いオリジナル曲を日本に送ってくれたんだけど　全部アメリカのミュージシャンが作った曲　その30曲の中から10曲を選んでレコーディングすることになったんだけど　どれもこれも　去年のアルバムの曲にくらべて音楽的にレベルアップした曲ばかりなの　それだけに歌いこなすのは大変だと思っていました」

10曲とも英語の歌詞がついていた　その英語の歌詞を参考にしながら　売野雅勇さんが日本語の歌詞を書いてくれたのだ

「リフレインの部分なんか　向うの歌詞をそのまま生かしてあるんです　ですから曲によっては半分近くが英語ってのもあるんです　去年より　英語がずっと多く入ってるのね」

歌詞を覚えるだけでも大変だった　さらに10曲のなかの1曲は　最初から最後まで英語だけなのだ　それは『FIDING EACH・OTHER』という曲

「この曲は　昨年のアルバムで私とデュエットしてドさったデビッド・フォスターさんが私のために作って　プレゼントしてドさったんです　今回は〝TOTO〟のギタリストのスティーブ・ルカサーさんとデュエットするんですよ」

フォスター氏はシンセサイザーのプレーヤーだが　同時にオリビア・ニュートン・ジョンやダイアナ・ロス　TOTO　シカゴなどのレコードのプロデューサーとしても活躍している　2〜3年前の〝TOTO〟を　いまのビッグ・バンドにしたのも彼だ

「そのデビッドさんの一番弟子トム・キーンさんも　今回4曲作曲してドさったし　9曲中8曲アレンジしてドさったんです」

トム・キーン氏は　奈保子のキーを調べるためわざわざ日本まで来てくれたのだった

さて　スティーブ・ルカサーとのデュエット曲『FIDING EACH OTHER』のデモテープが　デビッド氏から日本に送られてきた　そのデモテープを聴いて　奈保子やスタッフはまたびっくりした

「だって　歌ってるのがなんとオリビア・ニュートン・ジョンだったんですゥ！　後でわかったんですけど　ちょうどデビッドさんがこの曲を作ってる時　オリビアが彼の家に遊びに来たのね　そこでデビッドさんが〝いいところに来た　これ歌ってごらん〟って歌ってもらってテープにとったんだそうです　もう大感激しちゃいました」





今回のレコーディングで　奈保子がいちばん苦労したのは英語の発音だった

「英語の発音がうまくいったと思ったら音程がはずれたり感情移入が不十分だったり　逆に音程や感情移入がうまくいったと思ったら発音がダメだったりするんです」

英語の発音は　ガティーカ氏の秘書のスザーンさんが奈保子につきっきりでチェックしていた

「スザーンさんって21歳の女性で　普段はとってても気さくでやさしいんです　すぐ仲よしになったの　でも　こと仕事となると顔つきまで変わるんです　ちょっとした発音のミスでも聞きのがさない　自分の仕事にはすごく厳しく手抜きを絶対しないの　偉いわ～」

〝TURN〟の発音がどうしてもうまくいかないで　レコーディングが次の日になったことがあった　次の日　スタジオ入りをした奈保子と顔を合わすや〝お早よう〟というかわりにミス・スザーンは〝TURN〟といった

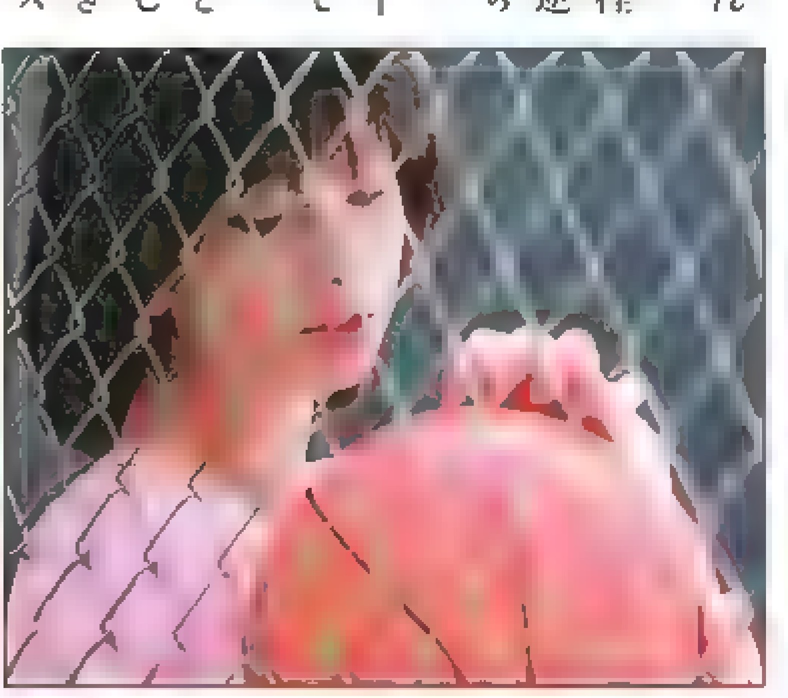
その日　奈保子が正確に〝TURN〟と発音して歌い終った時　ミス・スザーンはスタジオに飛び込んで行って奈保子を抱きしめ〝ベリーグッド〟を連発していた

「もし　今回のアルバムで　私の英語が本物の英語のように聞こえたとしたら　それは全部スザーンさんのおかげです　私も一生懸命だったけれど　彼女も私以上に一生懸命に教えてくれたんです」

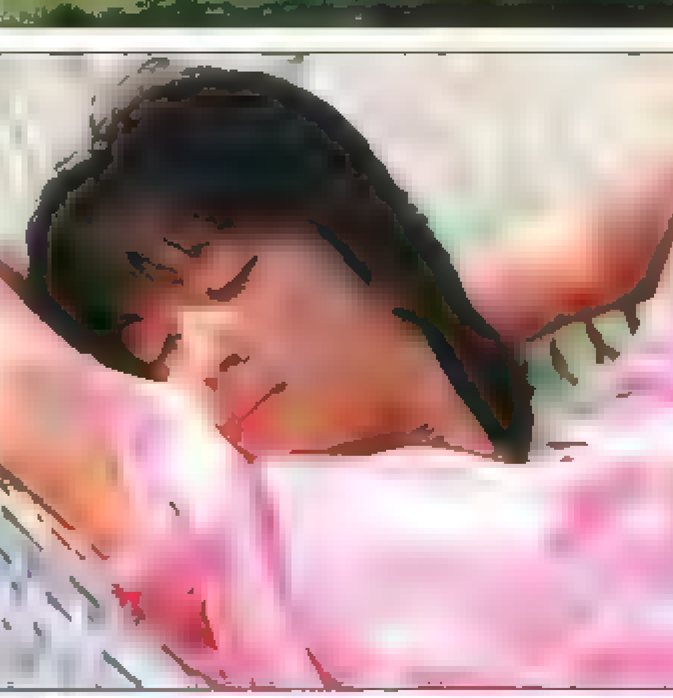
奈保子が外国でレコーディングするのは　昨年のロスにつづいて二度目だ

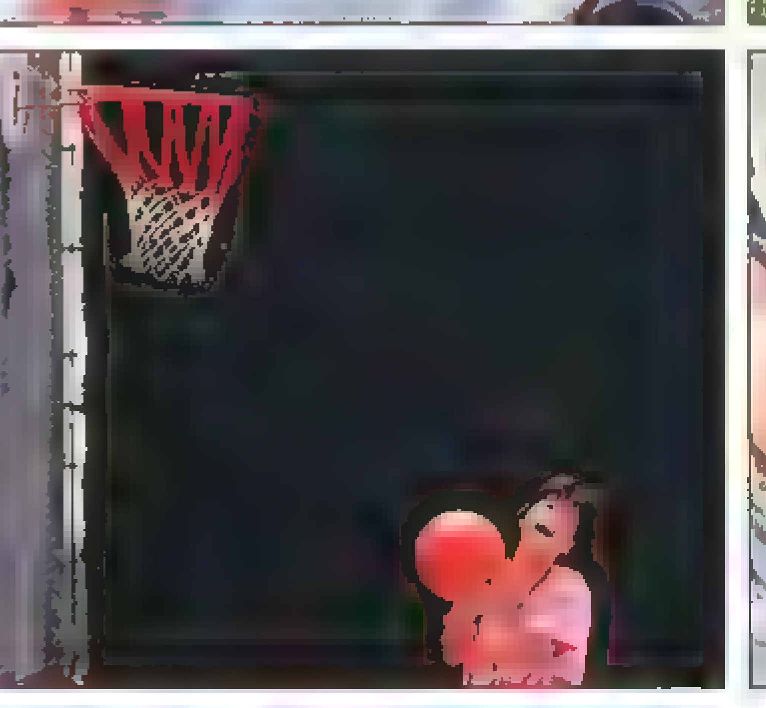
「日本でレコーディングする場合は　レコーディング以外にテレビとかラジオのスケジュールが入っているでしょう　外国でやれば他のお仕事はないから　レコーディングだけに集中できて気分的にも負担が軽いですね」

ホテルもロス郊外にしたため　スタッフ以外の日本人と接触することもほとんどなかったので　余分な気も使わずレコーディングに集中できたようだ

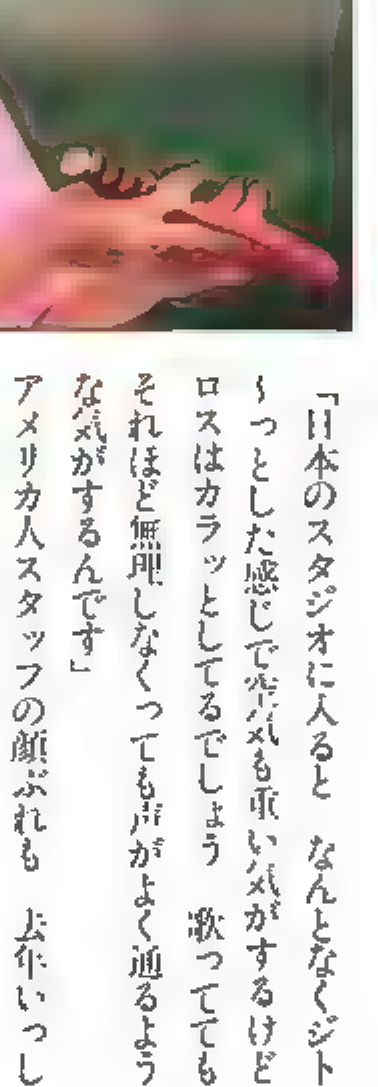












「日本のスタジオに入ると　なんとなくジトーっとした感じで空気も重い気がするけど　ロスはカラッとしてるでしょう　歌ってても　それほど無理しなくっても声がよく通るような気がするんです」

アメリカ人スタッフの顔ぶれも　去年いっしょにやった人が多い

「今回　集めた曲はナオコに合う曲ばかりだから　肩に力を入れずのびのびと自由に歌いなさい」

といってくれた　昨年は初めての外国でのレコーディングということもあって　固くなった部分もあったが　今回はそういうこともなかった

「去年はもう　歌うことに精いっぱいで気持ちの余裕がありませんでした　今回はそれとくらべると　だいぶ心のゆとりも出てきたようです　アルバム全体の雰囲気が　去年のアルバムより幅が出せたんじゃないかと思っています」

今回のアルバムは　実にバラエティに富んだ曲が集められている

「アップテンポな曲もあれば　スローな曲もありバラードも入っているんです『ONLY IN MY DREAMS』なんか　シンディ・ローパーっぽい曲なの」

このアルバムをプロデュースしてくれたガティーカ氏は　8月30日にちょっとだけスタジオに顔を出しただけで　仕事でヨーロッパに出かけ　帰ってきたのはレコーディングが全部終った9月7日だった

次の日　ビデオの撮影でスタジオに行くと　ガティーカ氏が奈保子の手を握り

「すばらしい出来だ　よくがんばったね」

といってくれた　ウンベルト氏は　スティーブ・ルカサーとデュエットしたテープのトラックダウンをしていたのだ

「素晴らしい曲とスタッフに恵まれ　最高のレコーディングでした」

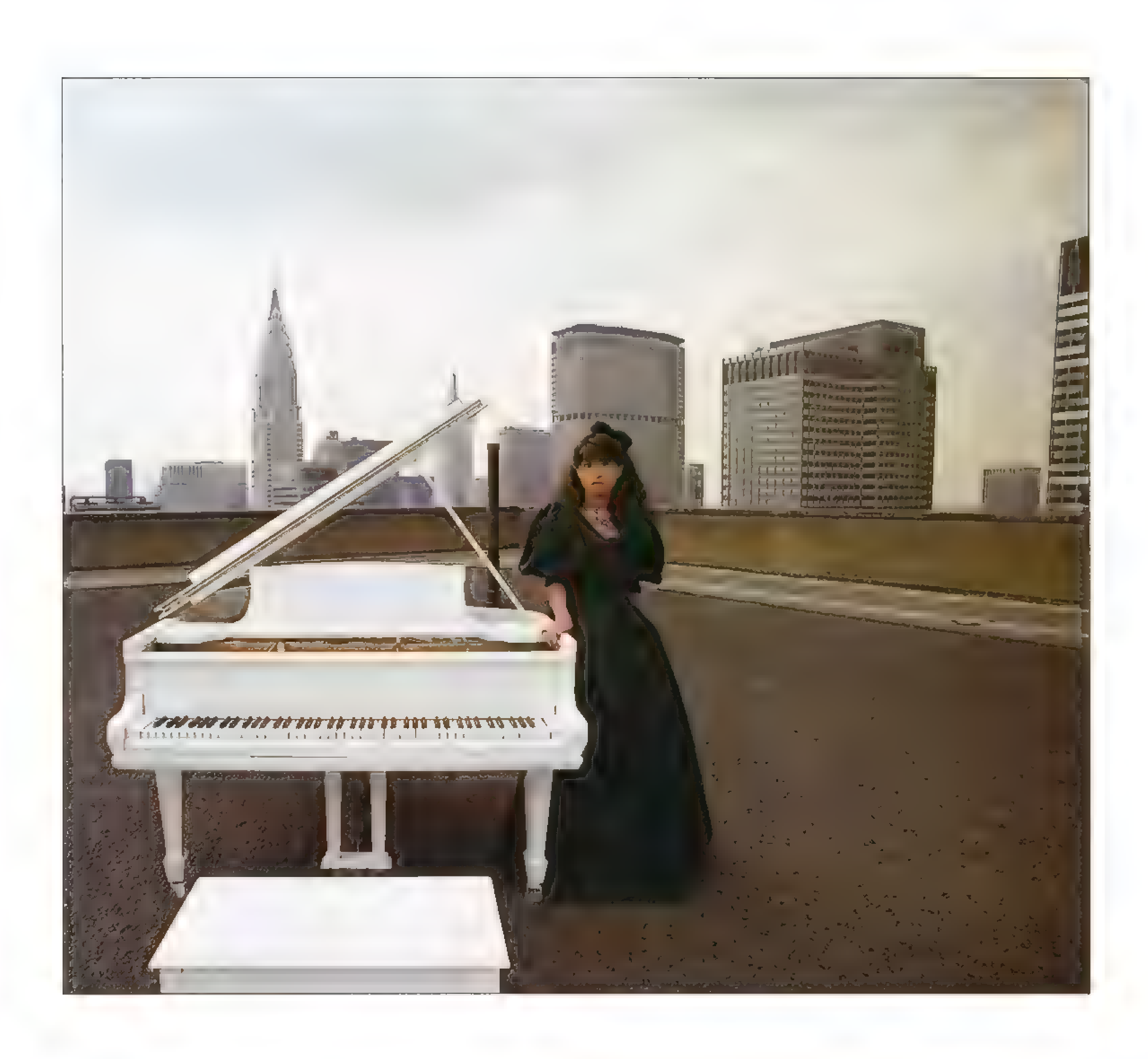
アーティストの表情で奈保子が言った

NEW YORK





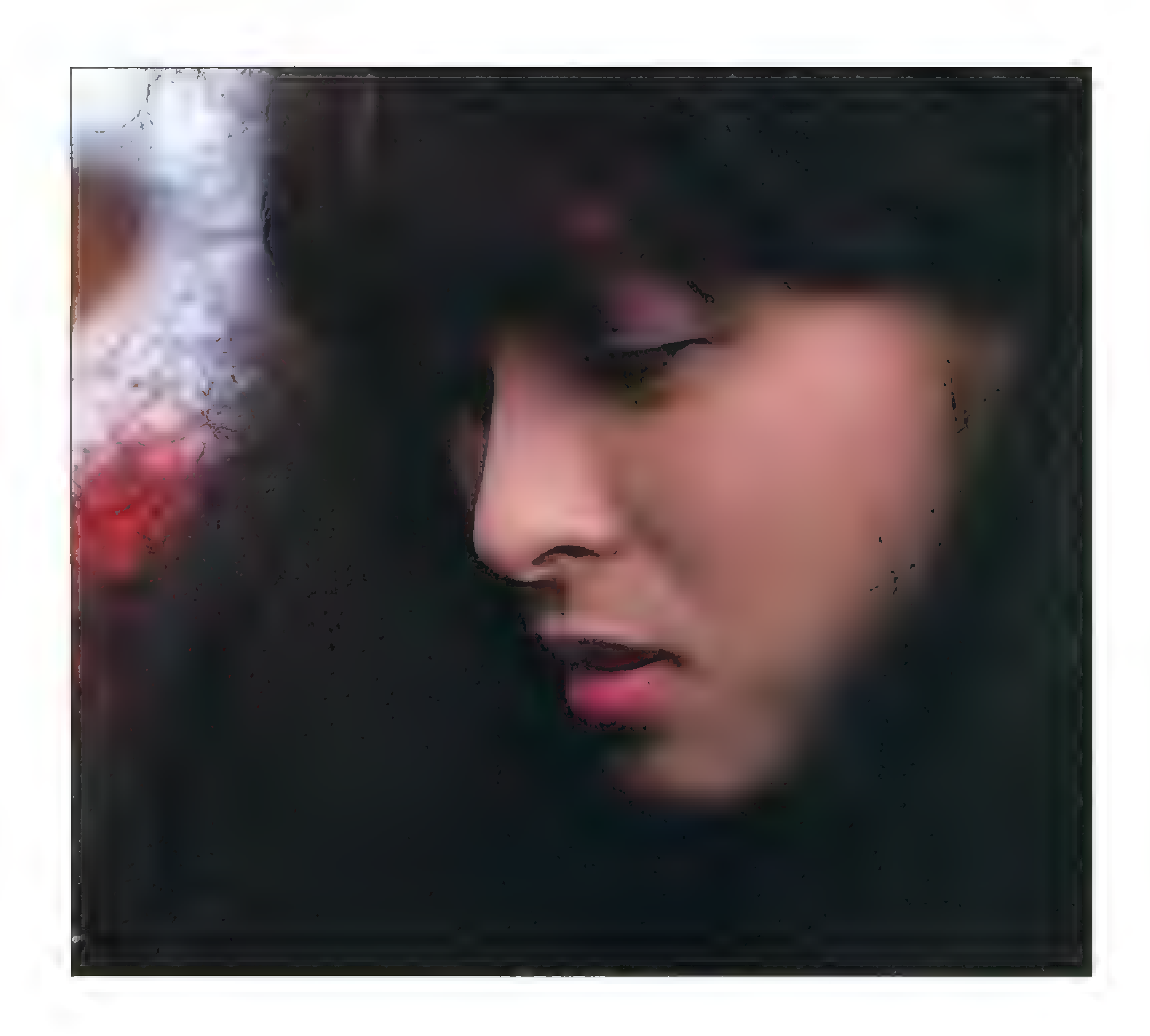










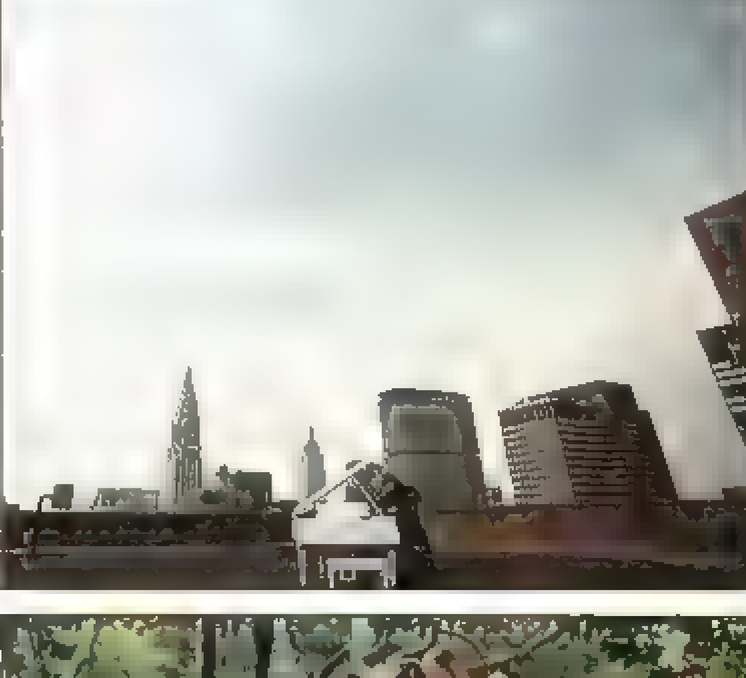










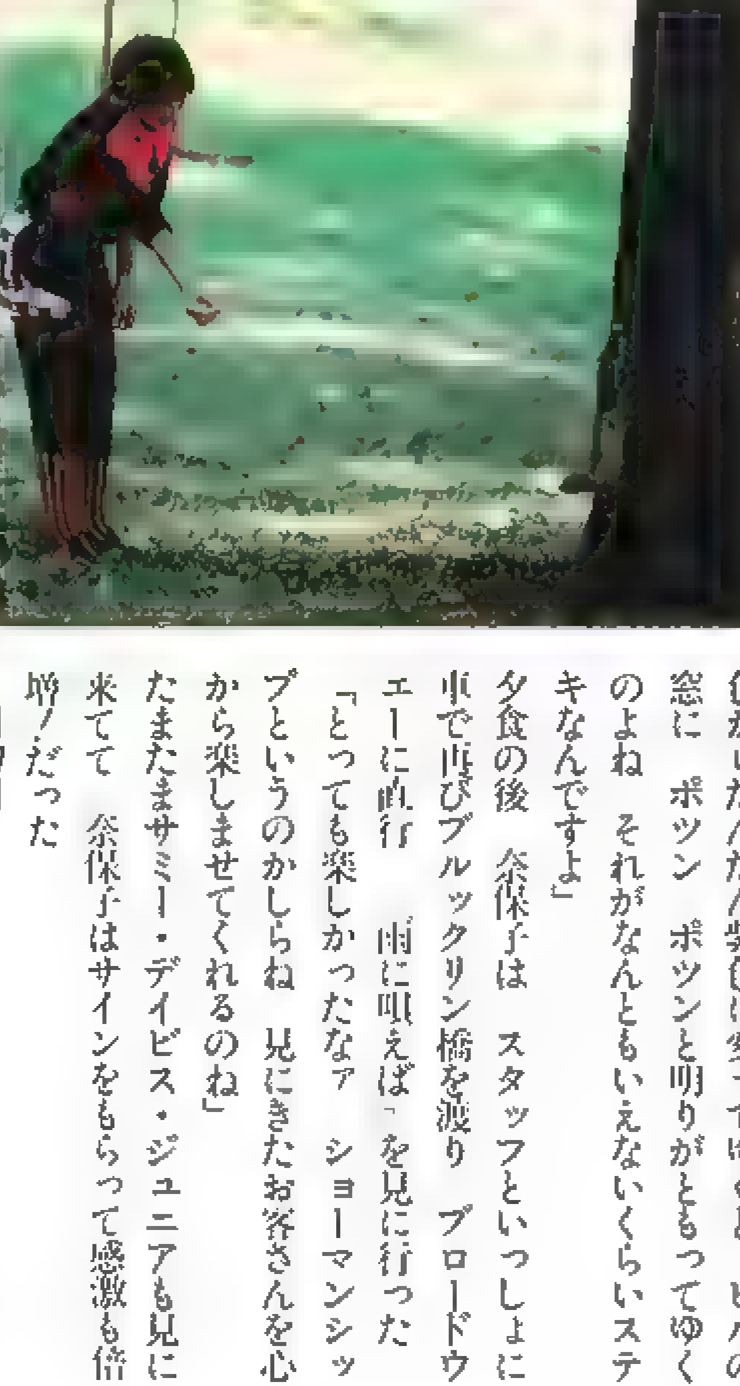













9月16日

ニューヨークでの撮影は　まずセントラルパークからスタート　つづいて市内を転々と移動しながらロケを精力的に行う

「これまで　ずうっと田舎を回ってきたせいか　ニューヨークに着いたとたん　"うわ大都会"って感じね　車の走り方も荒っぽいし　人の多さにも圧倒されちゃう」

奈保子にとってニューヨークは初めて　その活動的な姿にびっくり

この日のロケの最後は　ブルックリン橋からマンハッタン島を眺めるカット

「太陽が西に傾き　超高層ビル群がオレンジ色からだんだん紫色に変ってゆくと　ビルの窓に　ポツン　ポツンと明りがともってゆくのよね　それがなんともいえないくらいステキなんですよ」

夕食の後　奈保子は　スタッフといっしょに車で再びブルックリン橋を渡り　ブロードウエーに直行　雨に唄えば」を見に行った

「とっても楽しかったなァ　ショーマンシップというのかしらね　見にきたお客さんを心から楽しませてくれるのね」

たまたまサミー・デイビス・ジュニアも見に来てて　奈保子はサインをもらって感激も倍増！だった

9月17日

マジソン通りにある42階建てのビルの屋上にピアノを置き　ここでピアノを弾く奈保子をヘリコプターから撮影するという大がかりなロケが朝からはじまる

「すぐ近くにエンパイアステートビルやパンナムビル　それにクライスラービルなんかが建ってるンです　なんだかニューヨークの街全体をお客さんにしてピアノ演奏をしている気分で　もォ最高ですゥ」

空撮なので　タイミングを取るのがむずかしく　何回もやり直す　その間　奈保子は気持ちよさそうに　優雅にグランドピアノを弾きつづける　ニューヨークの街全体がその演奏



に聴きほれているようだ

「自分のオリジナル曲だとか　ショパンの曲の一部とか　思いつくまま弾いていたの」

このロケは　午後2時近くまでかかった　これで　奈保子のプロモート・ビデオの撮影は終了　思えば　9月7日　ロス郊外の油田地帯から　アメリカ大陸を横断しながら11日間にわたる大ロケだった

「いまは　まだ終ったばっかりでボーッとしていて　それほど感じないけど　これで日本に帰って　日が経つにつれていろんなことを思い出すと思うんです　普通じゃなかなかこれだけの体験できないでしょう　きっと　すごい貴重な体験になった気がしますね」

そういう奈保子の顔には　一つの大きな仕事をなしとげた満足感がある

この後　奈保子は雑誌の取材でニューヨーク市内をあちこちと移動　夕方からマジソン・スクエア・ガーデン近くのソーホーに出かける　ここは芸術家の街　若者の街で有名だ　そして夜はまたすっかり気に入ったミュージカルを見に行った

9月18日

撮影が始まってからはじめての休日　ゆっくり眠った奈保子は　午前11時ごろホテルを出てブロードウェイ通りや五番街をぶらつく

「映画で有名なティファニーのお店にも入ったけれど　ただ見るだけで出てきたの　五番街って高級品のブランド商品が多いでしょう　ちょっといいなと思って値段みたら　びっくりするぐらい高いのね　手が出なかった！」

というわけで　もっぱらウインドーショッピングで　ほとんど何も買わなかった

夕方　予定より早くホテルに戻る　夜は日本料理店で打ち上げパーティ

「いろいろお世話になりました」

深々と頭を下げる奈保子に

「よく　がんばった」

スタッフから拍手が起きる

翌19日　JALで奈保子は日本へと飛んだ

Produced by
TSUNEO TAKAHASHI／YOZABURO KAGAWA／HIROMI NEGISHI
Directed by
TAKASHI TANAKA／MASAHIRO YOZEN
Photographer
KUNIHIKO SESHIMOTO
Stylist
SACHIKO KUMAGAI
Art Director
NOBUO HIRONO
Designer
NORIKO KARIYA



河合奈保子写真集PART7
デラックス近代映画
定価2300円
昭和61年１月15日発行
発行人／小杉修造
発行／株式会社近代映画社
〒105 東京都港区西新橋２―７―４　第20森ビル

衣装＝ケスケラ/エルカ/ムービングブルー/ベティーズブルー/セクション・ファイブ
ポール・ポジション/マイエ/エイゾー/Ｆジャージー/イマック/スコッチ商会
ドリーム/岸田/岩波/オーム川辺/シモンヌ/ラストシーン/ｂクラブ/ＦＡＭＥ

協力／株式会社芸映プロダクション
印刷／大日本印刷株式会社
写植・版下／㈱ワールド写植



発行・近代映画社
定価2,300円

NAOKO TRANS AMERICA　河合奈保子写真集パート７

2019年2月18日　電子書籍版発行
著　者　株式会社　近代映画社
発行人　飯田昌宏
発行所　株式会社　小学館
〒101－8001
東京都千代田区一ツ橋２－３－１
s-ebook@shogakukan.co.jp
底　本　1986年1月15日　株式会社 近代映画社発行

応募キーワード⑦：ん